

保育士養成校における地域の子育て環境作りにつなげる
カリキュラムの検討
—— 運動遊び・親子遊びに関する支援について ——

智原江美¹⁾ 前迫ゆり¹⁾ 石田慎二¹⁾ 中田奈月¹⁾
高岡昌子²⁾ 福田公教³⁾

A research on child rearing support program sponsored by childcare center in Nara Prefecture and its implication to the training curriculum for childcare center workers

Emi CHIHARA¹⁾ Yuri MAESAKO¹⁾ Shinji ISHIDA¹⁾ Natsuki NAKATA¹⁾
Masako TAKAOKA²⁾ Kiminori FUKUDA³⁾

Abstract

The purpose of this report is to improve a training curriculum for childcare worker from the view point of physical education. Today, it is necessary for childcare center to provide with various types of support for parents in the neighborhood to help good child rearing. In Nara Prefecture, 76.3% of childcare center allow the parents and children living in nearby area to regularly use childcare center garden, and 47.1% also have a workshop of children's play and family activities for their parents. The students as trainee of childcare worker must learn the skill not only to get along with each caring child at childcare center, but also to facilitate a good relation between children and parents. We must improve the training program including student's participation of community events for parents and kids, so that the students can learn more nursery rhythms and physical activities as well as importance of tactile contact between parents and children.

キーワード：子育て支援，保育士養成カリキュラム，運動遊び，親子遊び

Key words: child rearing support, childcare worker's training curriculum, children's play with physical activities, children's play with their parents

1) 奈良佐保短期大学, 2) ロンドン大学, 3) 種智院大学

はじめに

本共同研究は地域の子育て支援や、子育て環境づくりにむけて、地域、家庭、保育現場そして保育士養成校の連携をいっそう図るための保育士養成校におけるより有効なカリキュラムについて検討することを目的として行われた。本報告では、特に体育学に関連した視点から、運動遊び・親子遊びについて保育所がどのような子育て支援を行ったり子育て環境づくりを担っているのかといった具体的な取り組みをアンケート調査により把握し、その問題点を明らかにすることにより、社会のニーズに応じた今後の保育士養成のカリキュラム内容の改善につなげようとするものである。なお本共同研究は「地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成における可能性と将来展望に関する学際的基礎研究」として、2003年度および2004年度に文部科学省・私立大学教育研究・高度化推進特別補助・学術研究推進特別経費（研究代表 前迫ゆり）を受けて実施されたことを付記する。

今日の親子遊び・運動遊びに関する問題

教員養成課程の学生とともに「親子あそび教室」のプログラムを展開した笠間¹⁾によると、現代の親が親子の遊びに関して不満や不安を感じている事柄として、「遊ぶ場所が身近にない」、「遊ぶ友達がいない」、「遊びの機会が少ない」、「子どもとどう遊んでよいかわからない」ということをあげている。

また、2004年11月3日付読売新聞朝刊には「子ども時代に異世代で遊んだり、小さな子どもを世話したりする機会の少なかった今の大人にとって、子どもと付き合うことが難しくなっており、「遊び」を通して親子の対話を深める試みが必要となっている」という記事が掲載されている。さらに、本学で2004年12月に実施された本学主催の「親子講座」を受講した母親21名にアンケートを実施したところ、外遊びの楽しみ方、集団遊びの楽しみ方などについて教えてほしいといった感想もみられた。

このように、今、子育てを経験している親の世代は、自分たちの経験不足から子どもとの遊び方がわからないことに不安や戸惑いを感じている人が多いことが予想される。現代の保育士養成課程にいる学生たち

も、このような親の世代と年齢的に大きな差異はなく、むしろ多くの学生はまだ自身の子供を持たないため、よりこれらの経験が少なくなっているといつてよいであろう。

現在の本学で開講されているカリキュラムはこのような学生が将来、子育て支援・子育て環境づくりを担うことのできるための内容が組み込まれておらず、現状分析を踏まえたカリキュラム内容の検討が必要であると考えられる。

アンケート調査の結果

奈良県下の保育所を対象に実施した今回のアンケート調査のうち、本稿に関連が深い、「親子遊び」、「運動遊び」に関した、問14～17「園庭開放について」、問18～22「親子遊び教室について」、問24「子育て支援サービス実施の問題点と課題」、問71「今後の保育士養成において充実・強化の必要性のある科目」を検討の対象とする。

「園庭開放」の実施についてたずねた質問(問14)では、表1に示すように、全体の76.3%の保育所で何らかの形で「園庭開放」が行われていた。その頻度(問15)は「月に1回」の実施が42.0%でもっとも多く、ついで「随時開放」(30.4%)、「週に1回」(24.6%)、「半年に1回」(1.9%)となっている。「園庭開放の対象児」(問16)については表2に示すように、未就学児を対象としたものが83.1%を占めた。

表1. 「園庭開放」の実施頻度

(単位：%)

実施していない		23.8
実施している		76.3
	内訳	
	随時	30.4
	週に1回	24.6
	月に1回	42.0
	半年に1回	1.9
	年に1回	0.0

問17では「園庭開放の内容」について自由記述形式で回答を得、全体の77.8%から回答があった。その

表2. 「園庭開放」の対象児
(単位：%)

保育所園児	7.8
未就学児	83.1
就学児	7.8
その他	1.3

表4. 「親子遊び教室」の対象児
(単位：%)

保育所園児	8.6
未就学児	80.0
就学児	2.9
その他	8.6

内容として「園庭、遊具、おもちゃなどを自由にできるように開放し、親子で好きな遊びを楽しむ」といった、場所、施設のみを提供する形態と「在園児との交流を図るプログラムを企画したり、園の行事への参加の勧誘や発達にみあった遊びの指導をおこなう」といった積極的な支援を展開している保育所の2つに大きくわかれた。

「親子遊び教室」の実施についてたずねた質問（問18）では、表3に示すように、全体の52.9%の保育所が「親子遊び教室」を実施していた。実施の頻度（問19）は表5に示すように「月1回」が最も多く、32.3%を占め、ついで「随時」と「半年に1回」の実施が22.6%、「週1回」の実施が16.1%、「年に1回」の実施が6.5%となった。「親子遊び教室の対象」（問20、問21）は表4に示すとおり、未就学児とその保護者を対象としたものが83.1%であり、表5に示すように同伴者のうちもっとも多いものは母親で、全体の51.1%を占めた。ついで両親以外の家族（24.4%）、父親（17.8%）の順となっている。

表3. 「親子遊び教室」の実施頻度
(単位：%)

実施していない		52.9
実施している		47.1
内訳	随時	22.6
	週に1回	16.1
	月に1回	32.3
	半年に1回	22.6
	年に1回	6.5

問22では「親子遊び教室の内容」について自由形式

表5. 「親子遊び教室」の参加者
(単位：%)

母親	51.1
父親	17.8
その他の家族	24.4
その他	6.7

でたずね、全体の75.7%から回答があった。その内容として、「親子のふれあいやスキンシップを中心としたあそびを紹介する」形態が多く見られた。さらに「家庭ではできない遊びを企画したり、地域の高齢者との触れ合いの場とする」など、積極的に保育所の施設を活用できるような企画や異なった世代との交流の場を提供して、地域全体にむけての子育て支援を行っている保育所もみられた。

これらの「子育て支援サービスを実施するうえでの問題」についてたずねた質問（問24）は、表6が示すように、「スタッフが少ない」ことをあげた保育所が50.0%であった。以下、「財源がない」、「事故への対処に困る」、「場所がない」と続いている。

問71ではより良い保育士の養成にむけて、「今後の保育士養成において充実・強化の必要性のある科目」についてたずねた。現在本学で開講している保育士の資格取得に関わる専門科目32科目すべてをあげ、その内、充実・強化の必要があると思われる科目5科目を選択する形式で回答を得た。各科目についてそれぞれの内容については説明せず、単に科目名をあげたのみである。この質問に関するすべての科目についての回答は別稿で示しているが、ここでは、本学では実技科目として扱っている「基礎能力（音楽）」、「基礎能力（造形）」、「基礎能力（体育）」、「保育内容（表現）」、

「レクリエーション指導法」の5科目について取り上げ、その結果を表7に示す。これらの実技科目のうち、充実・強化の必要があると思われる教科として上位を占めたものは、「レクリエーション指導法」が12.2%であり、以下「基礎能力（音楽）」「保育内容（表現）」の順であった。

表6. 「子育て支援サービス」実施上の問題点
(単位：%)

スタッフが少ない	50.0
時間がとられる	24.1
事故への対処に困る	32.8
専門的知識がない	13.8
人が集まらない	19.0
場所がない	31.0
財源がない	36.2
その他	19.0

表7. 「充実・強化の必要性のある科目」
(実技関係) (単位：%)

基礎技能(音楽)	10.0
基礎技能(造形)	4.4
基礎技能(体育)	6.7
保育内容(表現)	8.9
レクリエーション指導法	12.2

本学の保育士養成の課題

保育士養成を開始して4年目になる本学は、現在の幼児教育科の前身である初等教育学科の開講科目を中心に保育士資格取得に必要な福祉、乳児、障害児の保育に関係した資格取得に関する科目を充実させてきた経緯がある。

体育に関連した科目である「基礎能力（体育）」(実際の科目名は「体育」)については、子どもの発達段階に応じた運動遊びの実践と指導法・教材の工夫に重点をおいて現在の授業を展開しているが、歩く・走る・跳躍することなど、基本的な運動能力が身につく

3歳児以降の発達に見合った教材を取り扱うことが多いのが実状である。今回のアンケート調査では「園庭開放」を実施している保育所が8割弱にのぼったが、園庭開放への参加者は幼稚園に通う前の母親とその子どもが多いと思われることから、乳児期の発達をふまえた運動遊びに関する教材についてももっと取り上げる必要があろう。特に学生には乳児の運動遊びをイメージすることが困難なように見受けられる。また、学生一人一人の幼少時の遊びの体験は種類・量ともさまざまであり、自身の運動遊びの経験が少ない学生にとって、子どもたちの遊びの面白さ、楽しさを共感し気持ちを受け止めることが難しいように感じられる。今後も授業においてできる限り多くの運動遊びを経験し、発達段階を踏まえたうえでの指導法を習得すること、さらには子どもが興味を持つ教材の工夫が必要となってくる。しかし、授業内での運動遊びや指導の体験は限られており、実際に子どもたちの動きを観察し、指導をしてみればじめて理解できることも多い。

「レクリエーション指導法」の授業では、「親子のふれあいの場」や「地域との交流の場」での活動を指導できることを目標に授業を展開している。アンケート調査でもたずねた、「親子遊び教室」のような「親子のふれあいの場」を想定して保育の計画を立て、実際に指導者になってレクリエーション活動を展開する課題を課しているが、親子のふれあう活動がイメージできず、実際の指導とかけ離れた計画を立てる学生もいる。このようなことから、子育て支援を担うことのできる実践力のある保育士を養成するためには、授業以外にも子どもと関わったり、乳児とその親と一緒に遊ぶ様子を見たり一緒に参加するといった、実践をより多く経験できるような場が必要となってくるであろう。また、「レクリエーション指導法」は「今後の保育士養成において充実・強化の必要性のある科目」のうち、実技関連教科の中で必要性がもっとも高いとされる科目であったが、これは単に運動ができる、子どもと関わるのが上手といった能力だけではなく、子育て支援を担う保育士には、子どもと保護者、地域の人々までも取り込んだ遊びの環境づくり、雰囲気づくりのできる能力が求められていることの現れであるといえよう。

運動遊び・親子遊びに関するカリキュラム についての展望

保育所へのアンケート調査での回答でも、「園庭開放」、「親子遊び教室」はそれぞれ8割弱、5割弱の保育所で子育て支援サービスの一環として実施されており、これらの活動をいっそう充実させるためにも、実践的な運動遊びや親子遊びの指導は保育士として必要な能力のひとつといえる。

問23では「子育て支援サービス実施の問題点」についてたずねたが、実施上の問題点として上位にあがってきたものは、子育て支援の内容にかかわるものではなく、スタッフ・財源・場所の不足、事故への対応ができないといった、資金面・制度面に関するものであった。このことは、まだ「子育て支援サービス」自体が緒についた段階であり、内容の充実には各現場においてこれから検討されるということを反映しているであろう。

これらの内容をいっそう充実させることのできる能力を持った保育士を養成するためには、学生が保育実習において基本的な子どもとの関わりや発達に応じた援助について学ぶこと以外に、親子がどのように遊んでいるのかを見る機会や保護者との関わり方を学ぶ機会が重要になるであろう。なぜなら、保育者が子どもと遊ぶことはもちろん必要であり、乳幼児とのスキンシップをとってうまく遊べることは必要な技能のひとつであるが、それは本質的に親子の遊びとは異なるものであるからである。保育者と子どもの関係はたとえ同じことをしていたとしても親子の関係にはなりえないのである。子育て支援においては、保育者は安定し

た親子関係を築けるような支援をしたり、スキンシップのとり方についてのアドバイスをしていかなければならない立場にある。これまでは保育士と子どもがどのように関わるかに重点を置いて学生を指導してきたが、これからは子育て支援・子育て環境づくりを担う保育士として、ふれあい遊びを中心とした親子関係の大切さ^{2),3)}についてアドバイスをし、さらに親子関係がうまく築けるような援助ができるノウハウについてもカリキュラムとして導入する必要があると考えられる。

今後、地域に開かれた短大として、定期的な親子遊び教室を開催したり、保育所で運動遊びを子どもたちに指導するような機会を設け、意欲のある学生を参加させることは、理論や実技の授業だけでは身につけることのできない応用力・想像力が必要となり、実践的な技術・技能の形成の場となりうると考えられる。これら学生参加のプログラムをオプション的なカリキュラムとしてでも直ちに導入していくことが急務であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 笠間浩幸, 大学と地域の子育てニーズをつなぐ教員養成の課題 — 「子育て支援」事業を通じたカリキュラムの構築 —, 教科教育学研究第18集, 27-43 (2000)
- 2) 山口創, 子どもの「脳」は肌にある, 光文社新書 (2004)
- 3) 正木健雄・井上高光・野尻ヒデ, 脳をきたえる「じゃれつき遊び」, 小学館 (2004)